

# 近代語にみられる「トル」と「ヨル」について

増井典夫

## 一 はじめに

筆者は、国語学会二〇〇一年度秋季大会（一〇月二一日於福井大学）において「保科孝一の〈言文一致〉観と〈トル・ヨル〉観をめぐって」と題して発表を行ったが、当発表では、先学の研究を顕彰しつつ、国語学の研究がきちんと先学の研究の上に積み上げられているか、検証の必要があるのではないかと問題提起したいという気持ちで行った面があった。（その発表の内容は、増井典夫（二〇〇二）「明治期口語研究の新展開に向けて——標準語と保科孝一、尾崎紅葉、そして「トル・ヨル」——」（『国語論究』9 現代の位相研究）明治書院）の中で記述している。）

国語学・日本語学に限らず、全ての学問は先学の研究をきちんと踏まえた上で行わなければ意味がないものだ、と言える切れるものだと思うが、筆者は、今後も研究の現状について、必要があれば問題提起を行っていきたい、と考えている。

さて本稿では、先の発表で取り上げた内の「トル」と「ヨル」について、近代語研究という面から今一度問題点の考察を行いたい。特に、ヨルに力点を置いて自分自身の研究の基礎となる点を整理しておきたいと考えている。

## 二 近世・明治期の「トル」

まず、近世・明治期のトルの使用について再確認を行っていく。まずは前田勇の辞典での記述を見てみる。

とる《助動ラ五》動詞連用形につく。……ている。……ておる。「そんなどこで何しトンね」「ようわかつトります」

（『上方語源辞典』、一九六五年、東京堂出版）

次に『日本国語大辞典』での記述を挙げる。

◇とる【連語】 その状態にあるという意を添える。……ている。

**補注** 東京語の「てる」にあたる。同じく「ておる」から「ちよる（じよる）」となった地方もある。また、地方によっては、「書いとる」と「書きよる」とを区別し、後者を動作・作用が進行中の状態にいうのに対して、前者を結果の残存する状態に用いる。（『日本国語大辞典』第二版）（初版の記述も同様）

さて、保科孝一はトルを口語の標準的な音韻変化としている。

テイル、デイル、テオル、デオルわ、実際発音する際に、食ツテル、死ンデル、枯レトル、遊ンドルという様に、融合することがある。（『日本口語法』三〇四頁）、（明治四四・一九一一、同文館、〈勉強出版より復刻〉）

この記述のあとに、次のような記述がある。

僕ワ、花ワ、コレワ、ソレワ、酒ワ等の形式が、実際の発音において、ボクア、ハナー、コリヤ、ソリヤ、サケイという様に融合することがある。然しこれわ鄙俗の語であるから標準語としてわ取ることが出来ない。

食ツテシマツタ、取ツテシマツタ、行ツテシマツタ等の形式が、実際の発音において、クツチャツタ、トツチャツタ、イツチャツタという様に融合することがある。これも鄙俗の語であるから取ることが出来ない。(略)

固より中にわ標準的のものとして認められないものがある。例えば、ボクア、ハナー、サケイ、クツチャツタ、行ツチャツタという様なものわ、標準語としてわ捨てなければならん。けれども、その他のものわ、すでに標準的のものになつて居るから、之を捨てるが出来ないのである。(同書、三〇五〜三〇六頁)

このように保科はトルを標準語とみなしているわけである。

では、近世以降のトルの例である。二例ほど挙げてみる。

◎ばんとう「わたしも、きのうのけんかは對人あひてを知居しよとりますが (『浮世風呂』文化六・一八〇九〜文化十・一八一三、

『日本古典文学大系』六三、二四九頁)

◎ボーイに掃除するやうに云ひつけておきましたんで。ど、綺麗になつとるか知らん (有島武郎『或る女』明治四四・一九一一〜大正八・一九一九、初版一〇七頁)

また、尾崎紅葉『多情多恨』(明治二九・一八九六)においては、トルは計一一八例見られるが、主人公の柳之助のみの

使用である。(一方、友人の葉山はテイル・テルのみの使用である。)

◎「それだから、何とか方はあるまいかと聞くのに、君はお島に惚れとるもんだから……。」(柳之助)

「おい／＼大概にしてくれ給へ、惚れてるとは余りだよ。」(葉山)

(『紅葉全集(岩波書店)』第六卷一—一六頁)

◎「未だ解らないのかい、是は怪しからん！ 君は酔つてゐるからだ、……。」(葉山)

「酔つとるより腹が減つとる。」(柳之助)

(『同』二二三頁)

このように、トルは東日本でも用いられていたわけである。

ところで、トルは、明治期には「標準語」と認められたりもしていたわけだが、右に挙げた、『多情多恨』での用例に見られるようなトルは、いわゆる「役割語」という観点でも捉えられるようなものとも思われる。(『書生言葉』の特徴の一つとしてよいものであるうか。)なお、「役割語」とは金水敏による用語で、例えば金水(二〇〇三)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店)では、そのの例として、「博士語」「じゃ」「ん」「ぬ」「とる」「おる」等を挙げている。代表例としては手塚治虫『鉄腕アトム』の登場人物「お茶の水博士」の言葉づかいなどが挙げられている。

お茶の水博士「親じゃと？ わしはアトムの親がわりになつとるわい！ (『鉄腕アトム①』九二頁)

まとめると、トルは明治期には「標準語」と認められるようなものでもあったが、現代の全国共通語では、「役割語」のような用法のみになっているとも考えられる。そして、その用法の変化につながるきざしが、既に明治期の用例から見ら

れた、とも捉えられるということである。ただ、今後さらに検討を続ける必要がある、とは考えている。

### 三 近世上方語と近畿・東海方言での「ヨル」

一方、ヨルについてである。まず前田勇の辞典での記述を見てみる。

よる《助動ラ四》「をる」の訛。動詞連用形につき、軽い罵りの気持を表わす。元禄期にすでに現れ、時と共に盛んになるが、完全に「をる」に取って代わるのは現代に入ってからである。（『近世上方語辞典』、一九六四年、東京堂）

よる《助動ラ五》第三者の動作を狎なれ、またはまたは軽く侮なつていう。男性専用語。〔語源〕「をる」の訛。近世上方語（元禄期以来）は、対者・他者の動作にいう。（『上方語源辞典』）

てよる「ていよる」の約。男性の専用語で、「ている」「ておる」のぞんざいな言い方。ただし第三者の動作にいう。

「嫁はんに逃げられて、やもめ暮ししテヨル」（『上方語源辞典』）

では、ヨルの近世での用例を次に挙げる。

①さりながら大方まづ済みよつたが、一部始終を聞いてたも（曾根崎心中、元禄一六・一七〇三、『近松全集』四卷）

一三頁、岩波書店）

② きた（きた）の事をいふてきよる（北華通情、寛政六・一七九四、『洒落本大成』一六、二〇四頁上3）

③ しよる しをる也。来をるをきよるといふ（浪花聞書、文政二・一八一九頃、日本古典全集）

④ 露 何をいふぞへ角がいつちりくつがよい芝翫といふやつはゑらいやつじや給金とらずにはたらきよる李還がかなうものか（粹の曙、文政三・一八二〇、『洒落本大成』二六、二九七頁上12）

⑤ 母 わたしも其だめヲをしたら。新らしいもあたらしい此うへなし。それでもこはけりや。どく味にさんじませうかと笑ふてゐよつた（箱まくら、文政五・一八二二、『洒落本大成』二七、一四三頁上15）

⑥ わしけふ嶋原の井筒屋へいたらゑるあやまつてゐよるなあ初手のよふにほんつきよるとよこづらはつてやろとおもたにゑろくへいくいふたよつてかんにんしてやつた（興斗月、天保七・一八三六、『洒落本大成』二九、一三五頁上15～16）

⑦ 梅尾のべらぼう早ふきよるとよいにあした一ばんりくついわんならん（同、一三六頁上8）

①～④は大坂の例、⑤～⑦は京都の例である。

いずれも待遇表現的で「軽卑語」とまとめてもよいものように思われる。（先に挙げた『日本国語大辞典』の「とる」の項目の補注に、「よる」について、「地方によつては動作・作用が進行中の状態にいう」とあったが、ここでは特にそのように解釈する必要はないだろう。）近世期以降の上方・京阪では、ヨルは基本的には軽卑語として用いられてきた、とまとめてよいのではないか（トルはアスペクト表現だと見てよいであろうが）。

ところで、上方の女性はヨルを使つてきたのか、という点も気になる問題であるが、①（話者・徳兵衛）②（喜多市）④（露雪）は男性の使用例であるが、⑤「箱まくら」の母親の例及び⑥⑦の「興斗月」の例（話者は義太夫芸子浅吉）は女性の使用例であり、当時は上方の女性もヨルを使用したと見てよいように思われる。

さて、日本語史の中でヨルの記述を行う場合、手順として、先の近世上方語の記述から考察は進めて行かねばならない。そうすると、ヨルを、アスペクトというよりもむしろ、モダリティ的意味として捉えるところから始める必要がある出てくるであろう。

ところで、丹羽(二〇〇五)には次のような記述がなされている。(資料は「岐阜県土岐市・愛知県犬山市及び江南市のものである。)

ユキガフツトル(雪が降っている)

ユキガフリヨール(雪が降りつつある)

意味の相違が完了と進行であれば、フツトルは既に積もっている場合であり、フリヨールは今降っている最中である。しかしフツトルは降っている最中にも使える。この場合にトルが使えるのは動詞の意味によるのであり、「死ぬ」などの瞬間動詞ではこのようなことはない。この点に着目して標準語のテイルが動詞分類の基準になることもある。

しかしその前に「降る+トル」や「降る+テイル」が両方を表し得る理由を整理し、ヨルとの相違を明らかにしなければならぬ。(丹羽一彌『日本語動詞述語の構造』(笠間書院)九四〜九五頁)

ヨルは現場での目撃情報である。(『同書』九六頁)

近畿中央部のヨルは待遇表現に使われるが、待遇というのは現場での人間関係に関わることであるから、目撃とまでは限定できないにしても、話し手の主観や状況判断の顕れである。(『同』九七頁)

(なお、ここでの「近畿中央部」とは京都大阪を中心とする地域を指すものと考えるべきもののように、例えば神戸方言などはここからははずれるようである。<sup>3)</sup> また、「完了と進行両方を表し得るトル」について工藤(二〇〇六)は「標準語型」と言っている。<sup>4)</sup>)

丹羽前掲書には次のような記述もある。

従来の説の話が難しくなるのは、ヨルの持つ意味全部がトルと対立するものと考え、全てをアスペクトという所与の意味範疇の中だけで説明しようとするからである。ある理論で説明できない食い違いがあれば、理論より事実を優先すべきであろう。それぞれの言語事実を詳細に観察し、それに適した枠組みを帰納的に設定して処理すれば、もう少し話は分かりやすくなるのではないか。近畿以东の方言のヨルの意味や職能は、アスペクトという分野から離して考えれば整然と説明できることが多い。一般化とか他の言語と比べるといっているのはその後のことである。

トルとヨルはアスペクトという文法範疇の中で対立している形式ではない。トルは実現状態の継続という客観的なアスペクトを表し、「命題」を構成する形式である。ヨルの方は現場での目撃・経験という個人的な主観であり、「判断」を構成する形式である。両者は職能の異なる別の種類の形式である。(『同』一〇〇〜一〇一頁)

現代でトルとヨルが使われている方言全てに、この丹羽の説明を当てはめるのは、なかなか難しいものがあるようだが、少なくとも、近世上方語と現代京阪(を中心とする)方言及び東海方言では、この説明(トルはアスペクトでヨルは違うということ)を十分念頭に置いて考察を進めるのが妥当であろう、と現在筆者は考えている。



#### 四 西日本方言に見られる「ヨル」について

ところで、現代の西日本方言のアスペクト表現では、

トル	完了（結果の継続）
ヨル	進行（状態の継続）

の意味・用法を持つとされている。<sup>(5)</sup>

一方、『日本国語大辞典』でのヨルについての記述は、次のようになっている。

◇よる「助動」 動詞の連用形について、動作主を軽く卑しめる意を表し、また、その動作が進行中であることを表す。  
（『日本国語大辞典』第二版）（初版も同様）

先の三節で扱った用法（軽卑語のような場合）と、西日本方言での用法を合わせたような記述かと思われる。  
ところで、保科は、ヨルについて次のような記述を行っている。（なお、保科は「関西」という言葉を「西日本」の意味で用いているようである。）

関西地方では、進行現在の形式として、食ヒ居ル、見居ル（実際の発音においては食イヨル、見ヨルといって居る）

といふのを、食ツトル、見トルといふ、現在の形式から区別して用ゐて居るところが多いが、関東地方には、この区別が殆ど存在しない。例へば、猫ガ死ニヨル、火ガ消エヨルと、猫ガ死ンドル、火ガ消エトルの区別は、関西地方には存在するが、関東地方にはないのである。(『国語学精義』、明治四三・一九一〇、同文館、二二八頁)

現在の東京語には、進行現在と現在との区別がないが、関西方言には、この区別が厳然として存在するので、此習慣は将来の標準語に採用する必要がないか何うか、やはり問題であろう。例へば、関西地方では、猫ガ死ニヨルと、猫ガ死ンドル、火ガ消エヨルと、火ガ消エトルの区別が、厳然として存在するけれども、東京語には、猫ガ死ニヨル、火ガ消エヨルに相当する言ひあらはし方がない。猫ガ死ニカケテ居ル、火ガ消エカケテ居ルと云ふ言ひあらはし方がないか何うか、研究を要する問題である。(同書、四七八頁)

このように、保科はトルを「現在」の形式、ヨルを「進行現在」の形式として捉えてゐるわけである。<sup>(6)</sup>

## 五 おわりに

さて、これまで筆者は、「近世上方語および京阪(を中心とする)方言のヨル」(A)と、「西日本方言におけるヨル」(B)を統一的に説明しようと考えてきたが、その考え方にはなお困難な所がありAのヨルとBのヨルは別物と捉えて考察を進めていくほかはない、と考えるに至つた。Aはアスペクトの意味というよりも「判断」を構成するもの、Bはアスペクトを構成するもの、と分けて捉える考え方を取る必要がある、ということになると現在は判断している。

ところで、京阪地区のヨルについて、これまで、

「中立的アスペクトが先で、それが衰退して待遇的になった」<sup>①</sup>

などと説明されることがあったが、このような説明は、近代語での使用状況からは、うまく当てはまらないと思われ、修正する必要があるものと考えている。

一方、近世において既に、上方語と西日本方言とでは、ヨルの用法は違う枠組みで説明されるべきもの、となっていたとも思われる。この方向で考え、検討を進めるべきか、とも思われるが、現代の西日本方言の「アスペクトとしてのヨル」の用法は、明治期の保科の記述くらいまではさかのぼれるが、さらにそれ以前の中央語との関連を文献上捉えるのは、なかなか難しい所があるもののように思われる。

## 注

(1) 保科の国語学者としての業績の一つに、本稿で取り上げた「トル」と「ヨル」の記述が挙げられるのだが、もう一点、「言文一致」についての記述も注目すべきものとして挙げられる。「国語学会二〇〇一年度秋季大会研究発表会発表要旨」での筆者の記述をいま一度ここに掲げておく。

松村明は「(である)調の言文一致体の文章すなわち口語体が東京語の一つの規範となり、共通語化を促進した」というような記述をしており(『増補江戸語東京語の研究』等)、遠藤好英等にも同様の記述が見られる。しかし、保科は「 DEAL」について「散文か韻文にのみ用いられるもので、談話には決してあらわれない」とし、「言文一致體はたとひ言文の懸隔を取り去るのが主要なる目的であるとしても(略)、言文は何処までも唯談話する通りにかきあらはしたものだといふのは、俗説である(『国語学精義』)とする。松村は上記著書に、保科の「尾崎紅葉の『金色夜叉』『多情多恨』等においては精煉修琢を加へた立派な東京語を見ることが出来る」との記述を引いているのだが、雅俗折衷体の作品「金色夜叉」をどうして保科が挙げているのか、意図の理解が不十分なように思われる。また、言文一致体を完成した作品とされる「多情多恨」において、地

の部分に古語的な表現がいくつも見られることの意味も、理解が不十分なのではないか。保科は「金色夜叉」「多情多恨」両作品共に「地の文」と「会話文」は違うことを踏まえた上で、両作品の「会話部分」を指して「立派な東京語」と言ったのであり、そこをもう一度考えることで、新たな研究も可能なように思われる。(『国語学』二〇八号)(二〇〇二年一月)一六三頁)

(2) 近代語研究においては、特に「近世語」の研究の面において、「江戸前期上方語」だの「江戸後期江戸語」だのといたった用語での研究発表が目につくようになった。なぜこれまで積み上げられてきた「近世」という用語を用いないのか、不思議でならない。二〇〇六年春季大会の発表でも、「江戸」として上方資料を扱っている発表が見られたりもした。

(3) 神戸市方言のヨル(ヨー)は中立的アスペクトの意味で用いられ、(進行)(状態の継続)を表すという。(久木田恵氏の御教示による)。

(4) 工藤真由美の記述は次のようなものである。

京阪方言では、人の存在を表すのに「イル(イテル)」「オル」という二つの存在動詞を使用することから、アスペクト形式も、シテルとシトルの二つの形式が、文体差、待遇差、感情・評価性の違いを伴いつつ使用されている。シテルであろうとシトルであろうと(進行)(結果)の両方を表すという点では、西日本方言型ではなく標準語型である。(『方言の文法』シリーズ方言学2)二〇〇六年、岩波書店、「第三章 アスペクト・テンス」一〇四頁

(5) 例えば工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』には、  
京阪地区を除く西日本の広い地域に分布する方言では、(進行)は「桜の花が散りよる(散りよー、散りゆー)、(結果)は「桜の花が散つとる(散つちよる、散つとー)のように、別の形式で表し分ける。(『同書』二頁、二〇〇四年、ひつじ書房)とある。

(6) この記述でのヨルは、先の丹羽のいう「現場での目撃・経験という個人的な主観であり、(判断)を構成する形式」を指しているとも考えられるように思われるのだが、無理があるだろうか。もう少し検討を続けたいと思っている。また、保科のいう「標準語への採用」の問題についても、さらに検討を重ねたいと思っている所である。

(7) 例えば中井精一「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」「トル」の待遇化について」に見られるような説明である。

「ヨル」と「トル」については、感覺的「ヨル」の方が軽卑度が強いように感じられる。これはアスペクト形式において進行と結果の区別をなくし同一の形式で表現される過程で、「ヨル」が消滅し「トル」に一本化すること起因している。つまり「ヨル」がアスペクトの意味を失い、いち早く待遇のマークになったのに対して、「トル」はアスペクト性をより遅くまで保持してきたため、感覺的「ヨル」の方が軽卑度が強いように感じさせるのである。しかしながら、言語変化の大きな方向性としてはオル系「ヨル」「トル」はともにアスペクト表現から待遇表現のそれに移行しており、オル系「ヨル」「トル」として一括して扱いたい。(『国語語彙史研究二』(二〇〇二年、和泉書院)左二八頁)

しかしながら、これまで見てきたように、「ヨル」は上方語では当初から待遇表現として用いられていたのであり、アスペクト性の消滅云々を論ずることは妥当ではないと思われる。(「トル」の待遇化については今後の課題として検討を行っていきたい。)筆者は上方語の「ヨル」については、考察の方向としては丹羽の立場を支持するものであることを今一度述べておく。

#### 主な参考文献(先に挙げた以外のもの)

- 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』(一九六二年、三省堂)  
工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト』(一九九五年、ひつじ書房)  
中井幸比古編『京都府方言辞典』(二〇〇二年、和泉書院)  
金水敏『日本語存在表現の歴史』(二〇〇六年、ひつじ書房)  
金水敏『日本語アスペクトの歴史的研究』(二〇〇六年、『日本語文法』六卷二号、くろしお出版)

(文学部・文学研究科教授)